

郷土室だより

第141号

平成23年10月31日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 23-026

「変りゆく都市像」(20)

《再考「山・里・野」》

◇(承前) 都市の誕生

飛鳥・平城・平安三都市のそれぞれの中に「公」の支配施設であった「東市」と「西市」が同時に設置されたこと自体は、当時の「市場原理」のあり方を端的に反映させたものであった。前号でも述べたように「複数の市」の論理は東西両市場の運営のあり方を、絶えずその利用者の前にさらけ出すことであり「優劣」の風評を継続的に公表することに通じた。

「複数の市」の内のどちらかが相手を圧倒して独占形態になった途端に、その「市場」は「いちば」としての意味を失ってしまう。いわゆる風評が生じることが出来なくなり市場の商品は商品としての意味を失い、独占者の配給物資化してしまう。このことは、いわゆるグローバル化した最近の国際市場でも実現する現象なのである。

ここで思い出させられることに平安京開都から約千百年後の昭和一桁

時代(一九三〇年代後半)に、東京市の範囲に公設の中央卸売市場を開設するに当たり、当時の「市場法」(中央卸売市場法のこと)で、それまでの各市場の間屋を統合した荷受会社を一家にするか、複数社にするかの得失について、生鮮食品市場関係者はそれを「単複問題」と呼んで壮絶な論争：いや商戦を繰り広げている。

東京の前身の近世都市江戸の場合、海岸低地を中心に大城郭が成立し、その周囲に公儀と言う強権をもつて全国の大名邸宅を集合させられるという特異な大口地帯が発生した結果として、半強制的な側面を持ちながら、これも全国から多種多様な業種の工人と商人が急速に集中した。

事の表現の一つのあり方として、例えば近代経済学の範疇では「生産・流通・消費」といったような表現が定型的に使われるが、近世都市江戸の場合は《ヒトと情報》が先ず集中し、そうした状況を維持するために原材料ではなく、「完成品としてのモノ」の移入が求められたのである。

工人(職人)の多くは武家の装備(武具など)の補充と補修にあたり、商人はあらゆる財貨を上方(主に大坂を始めとする工業先進地域)より

江戸に運びその利を得た。

つまり江戸は天下の城下町であり、そこでの必要物資は公儀の最初の統計書である「江戸入津表」に江戸湊に船で運ばれてきた品目と数量の統計書で見ると「米・酒・味噌・炭・薪・水油・魚油・塩・木綿・練り綿・醤油・銭」などの移入状況が記録されている。

直接口に入るものには「米・酒・味噌・醤油・塩」があり、それを煮炊きする燃料としての「炭・薪」、光源としては「水油・魚油」、そして日常生活での衣料としての「木綿・練り綿」。さらに貨幣の「銭」(銅貨)までが江戸に大量に移入され続けた。江戸は消費・流通・生産といった経済状況の中で都市としての発達を強いられ続けた。

江戸が必要とする諸物資はすべて海路で運ばれ、やがて菱垣廻船・樽廻船と呼ばれた大坂から江戸下りの定期航路で運ばれた。上方からの《下りモノ》に船来品にインポートは《下りモノ》と呼ばれて尊重された。

《下りモノ》を運んだ船の戻り荷《上り荷》は九十九里沿岸を産地とする干鰯・搾粕(魚肥としての干し鰯で東大坂平野の木綿栽培の主要肥料)

が、江戸深川に運ばれ江戸湊からリンクされて大坂に輸送された。

「江戸廻り」は関東地方一円で生活必需品が《下らないモノ》ながら商品として生産されるようになったのは、やつと「江戸百年目」の元禄三年（一六九〇）ころになってからのことである。この時点でもホシカは上方に盛大に運ばれていた。

つまり大都市の必需品生産地が近畿地方に独占されていた状況から、一世紀がかりで関東地方が追いついたという状況が生れたのである。しかし幕末にいたるまで依然「江戸廻り」商品は《下らないモノ》としての格付けで流通していたのである。

だが《下らないモノ》にも優位に立つモノもあった。それは百万の人口を支える「水」である。全国からの富を運ぶ船が江戸に集中出来た最大の理由と条件は水道だった。玉川上水建設（完成は貞享三〇一六八六年）の主目標は浅草川河口の江戸湊（佃島）鉄炮洲間への給水施設だったことにあった。当時の感覚としては公儀が民間産業のために水道建設工事をする

いうことはあり得なかった事であり、それゆえに江戸水道は実質的には財政的援助を与えていても「天下普請」ではなかったのである。

第二に注目すべきことはこの水道施設建設以後は江戸の海岸は深川沖のゴミの埋め立て以外には組織的な海浜埋め立て都市計画を止めている。水道の及ばない土地は市街地にはなりえないという至極当然な自然観が海岸開発を止めている。その水源は有限という《原則》が破られたのは嘉永六年（一八五三）のペリー艦隊に対抗するための台場建設という軍事施設建設のためだった。

もう一つは当時は生鮮食品（魚介・野菜など）の温度管理技術と遠隔地との輸送手段は皆無であり、そのため産地も江戸近郊に限られ、非常に極限された流通しか出来なかった。

言い方を変えようと都市内の生鮮食品流通は「生鮮」と「時間」との《勝負》の「場」だったのである。

◇歌の思い出

生ものの鮮度と自然の中の時間

とを考え直すきっかけとして、幼児期によく歌った歌……童謡というべきか唱歌というべきかの一つ

「春が来た」がある。「春が来た 春が来た どこに来た 山に来た 里に来た 野にも来た」(二番は「花がさく 花がさく どこにさく 山にさく 里にさく 野にもさく」、三番は「鳥がなく 鳥がなく どこでなく 山でなく 里でなく 野でもなく」歌詞

は高野辰之作詞・岡野貞一作曲で初出は明治43（一九一〇）年『尋常小学校読本唱歌』だとある（参考にしたのは『教科書にでている童謡・唱歌のふるさと』①（監修・著大賀寛、著者吉村温子、06年（株）岩崎書店）である。

この歌は同書によると「初出は明治43年」というから今年は百一年目になる。この「春が来た」の歌での《春の来た》は、一世紀前の日本の「人」が充滿していた山・里・野の順で来ていたことがわかる。

ただし当時としては、山といっても現在の登攀専用の山岳ではなくて、人が森林を育てながら生活していた、应该说山集落

を意味した。

今年（11年の台風12号）の桁違いの降雨量被災地である和歌山・奈良両県で多発した深層崩壊による土砂の大量流出の報道映像を見ると、その映像の限りでは森林の生え方が「貝割れ草」のバックそっくりで、いわば山肌に表層をなしていた木々の幹が密着したまま崩壊し流失している。

その密着振りはとても森林内人が立ち入って、木々を間引いたり枝打ちをしたりという、造林作業をした形跡（林道）が見えなかったのが共通の山相である。

かつては多くの「林家」が山中に生活していた名残はほとんど見られない森林、つまり深層ならぬ森林の手入れを欠いた結果としての新相の山地が、今度の被災地の特徴なのである（念のため付け加えると「林家」とは「農家」に対応させた「山林業」への呼称である）。（11/9/9 NHKスペシャル 8:00～8:45「記録的豪雨の衝撃」▽大雨が続く日本列島▽何が生死を分けたか▽突然裏山が消えた！深層崩壊の破壊力▽せきとめ湖出現 ふもとの町に迫る危険などが放映されている）

◇山岳集落

唱歌「春が来た」初出からほぼ半世紀たった一九六〇年代、つまり昭和三十年代に私は関東山地の東南麓一帯、言い換えれば青梅の御岳神社や八王子の高尾山で代表される山地の生業のあり方に興味を持ち、ヒマさえあれば現在は東京都の水源林地帯になっている奥多摩町や多摩川の北側の山地まで踏破した時期があった。

いまは自然の原生林の様相を持つている水源林の一帯は、その半世紀前までは一木一草もない砂漠の様相であったこと。そうした山地での人の生活のあり方は広大な焼畑での輪作地帯であり、いかめしい兜造りが特徴の山上家屋が数多く分布していた。

つまりこの地帯の集落の多くの家屋の縁先は、絶えず深い谷から湧き上がる雲の峰を「水平」に眺められる場所であり《行雲流水》という古諺そのままの場所であった。当時の「山」は深層崩壊する現場でなく実におおくの「林家」が暮らす天地であった。「山」の役割の第一は材木の生産にある。関

東山地とくにその東南麓一帯は十三世紀初頭に源頼朝の開いた鎌倉幕府の存在が一つの契機になったといえる。この新しい《首都》建設には開幕当時から暫くは、木曾

谷を中心とする材木を鎌倉・円覚寺の荘園があった「尾張国 富田荘」（現在の名古屋市中川区富田町）より、ある程度製材加工された材木として海路、遠州灘・伊豆半島・相模湾を経て鎌倉に運ばれている（『円覚寺文書』、詳しくは『鎌倉市史』史料編3を参照）。

鎌倉を中心にした開発が進むと現在の相模川水系の最上流部である「奥三保」が材木産地として定着していく。当時の都市建設の主要資材であった材木の重要性はあらためて述べるまでもない。奥三保は現在の相模野市北西部の山地を指し、その北部は武蔵国多摩郡の山地に連なる場所である。

それを現在の東京を中心にした地理的位置と比較すれば、鎌倉を東京区部に例えると、当時の交通運輸手段としての相模川水系は、現在の関東地方の利根川水系に当たろう。地形的な区分では現在の上越国境、つまり関東地方北西部

が十三世紀の奥三保ということになる。これらは単なる想像ではなく「鎌倉・円覚寺文書」の精査による一つの事実でもある。

またこの「山」には独特な水利施設＝水車が多くの沢ごとに成立していた。幸いなことに日本画の大家川合玉堂は、この水車…その設置場所ごとに多彩だった水車の形式ごとにそれをリアルに描いてくれている。その時期は多摩から「林家」が姿を消し始めた時に重なるだけにさらに貴重である。「山」

は木材と水力という名の動力源であったのである（11/9/16 p. 8. 00~8:45 NHKテレビ「キッチンが走る！東京奥多摩で山上の畑 幻のイモ&極上シカ肉 野菜の魔術師が魅せる 驚きの創作イタリアン」という番組で、かつての山上生活の片鱗が残っていたことを確認できて懐かしかった）。

「里にきた」

材木生産地としての「山」に対する、「里」に移ろう。現代的な感覚としては《小規模な水流》（自然河川と人工水利、ただし水運はな

い）を中心に成立した集落が「里」である。言い方を変えるとその原形は《わずかに食糧は自給を越す程度の生産》があり、したがってそれなりに《人々が定着し易い場所》であり、それゆえに多彩な《工人》＝職人の居住地にもなる。「山」の製材用水利を受ける形に養蚕・製糸・製織動力の発生と発達や、石材ごとに違う技法の石工、その石工用の鍛冶・村鍛冶、林業用具の鍛冶などの発生と定着、同様に木材加工と各種の木工の定着もはじまる場所が「里」である。そこまで人々の生業の多様化が進むと、あきる野市の旧名の五日市の地名の場合のように秋川の溪口部に、五日の日に「市」が立つ場所が成立して曲りなりに《自給自足》が可能となった場所が他ならぬ「里」としての五日市である。

五日市と同じような立地条件を持つ青梅は多摩川が溪谷から「野」に躍り出る場所に成立した「里」（都市）であり、その多摩川溪口部から本流沿いに羽村・福生・昭島・立川沿岸都市の列とは別に、小規模な「山」である狭山丘陵の南麓の小河川を持つ「野」を結び形に、

幾つもの「里」が連なる形に江戸への道である青梅街道を形成している。

その「里」の列を現市名でつなげば武蔵村山・東大和・東村山・東久留米・西東京(田無)・武蔵野各市などの原形である「里」を経て杉並区―新宿―江戸に通じる青梅街道を成立させていた。

いずれも「里」特有の施設としては酒・味噌・醤油などの醸造業をもつ。蛇足を付け加えるまでもなくこれらの「里」は、いずれも荒川水系に連なる小規模な「里川」を持ち、広漠な「野」である武蔵野の中で不十分ながら夫々《水源》を持つという一点、つまりオアシスの役割を持つが故に、街道という名の都市機能を与えられていた名残を持つ場所である。

また、かつては西多摩郡の雄とされ、幕末になると桑都とも呼ばれた八王子は、近世に入ると江戸から甲斐国府までの、青梅街道と並ぶ甲州街道で知られた宿駅の一つであり、また関東山地南東端で相模国の「山」である奥三保に連なる武蔵南部の「山」の中心であった。この地域にも山上生活者、林

家」が大勢いたのである。

ちなみにこの事実とともに広大な武蔵国の中で外洋である相模湾に最も近い地域は八王子を含む《多摩の横山》⇨多摩丘陵だという見方を述べよう。高尾山の南の本沢ダム辺を水源とし《多摩の横山》の南限を流れる境川は町田を経て、あの江ノ島の正面で片瀬川となつて相模灘に注ぐ。

また八王子の南方十キロの地点には相模川水運の最上流部の湊である橋本があることを現代人はすっかり忘れている。「里」である橋本は同時に湊町でもあったのである。

武蔵国に戻すと関東山地の「山」に連なる主河川である浅川流域の八王子が最大の「里」となり、やがて多摩郡内の最大の「市」をも形成するようになった。繰り返すがこの「里」は「山人」と「工人

⇨職人」の出会いの場を「農耕者」が提供する形において初めて成立した場所だといってよい。そうした場所に公儀は屯田兵的な与力・同心層を配置した。なぜ大名を配置しなかったかといえは、この「山・野」の混合地帯を江戸より僅

か十里余隔てた場所に、ことさら「封」を立ててその支配を委任する気にはならなかったからである。

それゆえに生業の異質な人々の集団がそれぞれ独立的に存在し、安定した食糧供給と労働力という「地の利」が大量な材木・燃料を生産した。幕末からはそれが養蚕・製糸・製織業を中心に特化し、さらに狭山茶で代表される武蔵国産の茶も加わって、安政の開国以後は一挙に国際貿易における主要産地にもなった。

「野」の場合

国語辞典での「野」とは《自然のままに草や木の生えた広い平らな土地》⇨野原のことであり、または《田畑。のら》の意味だとある。野のつく地名では古代の海人族が日本列島の各所に進出した証とされる安曇野(長野県松本盆地)を始め、京都ではあだし野、紫野、嵯峨野などであり、東京でも上野、中野、武蔵野などがある。また「野原」の「原」には浅茅が原・安達が原・戦場ヶ原・関が原などがあり、東京でも秋葉原はじめ多くの

原(ハラツバ)があった(加賀原・薩摩原・護持院が原・代々木原・権田原・三菱が原など)が有名である。前後するが類似の地名のあり方に奈良県には飛鳥の里・斑鳩の里といった「里名」の地名がある。

しかし「野」で最も有名なのは武蔵野であろう。北多摩郡に武蔵野市があるが本来の武蔵野とは関東平野南西部の洪積台地(富士・箱根火山の火山灰(関東ローム)・俗称「赤土層」)が表面を覆う平坦な場所、埼玉県から東京都北辺におよぶ広大な面積の平原が武蔵野台地である。

(この項続く 鈴木理生)